

M G に関する調査

新妻俊栄

1 調査目的

当校では、高い経営能力を養う実践教育を行うため、様々なカリキュラムが組まれているが、経営（技術面を除く）そのものの実践的な機会を確保することは容易でない。

この点を補う実践教育の手法として、経験学習というものがある。経営能力を養うためのマネジメントゲーム（以下、MGとする）もその一つである。MGは、もともと企業の人材教育のために開発された手法である。

近年、教育現場でもMGの活用が見られるようになってきたが、MGに関連する資料は少ない。

そこで本調査では、MGについて調査し、当校の学生を対象とした導入について検討することとした。

2 調査月日及び場所

平成12年11月23～24日 他
東京都 品川区立総合体育館（きゅりあん）他

3 調査内容及び調査結果

(1) MGについて

MGとは、ビジネス環境をモデル化したゲームである。現在、MGと呼ばれるものは、複数存在しており、その内容は多種多様である。

そこで、いくつかのMGについて以下に紹介する。

ア、MG（西研究所）

西順一郎氏がソニーの経営開発室時代に社員教育の一環としてドイツのビジネスゲーム（play boss）を基に開発したものの。

イ、Launch（ソニー・ヒューマンキャピタル）

月への観光を企画する旅行代理店となって、事業の成功を目指すもの。MBAの教材として使用されている。

ウ、FMG（愛知農業試験場）

パソコンによるシミュレーションを基本としたMGで、当試験場の山田専門技術員が農業者用にアレンジしたもの。

エ、Real Money（W. David Albrechtの著作）

ボードゲームのモノポリーをプレイしながら、会計資料を作成し、意思決定に役立てる方法を学ぶ。

オ、MG（武蔵野工業大学版）

4, 5人で構成されたネットワーク上で、企業の経営者になり、業績を競う経営シミュレーションゲーム。

*なお、今回は、都合により西研究所のMG（以降、MGと省略）を対象を絞り調査した。

(2) MGの概要

MGは、参加者が仮想の会社を設立、専用の盤を利用し、経営意志決定から材料の仕入・生産・商品の販売・代金の回収まですべてを一人で行う全員参加型の研修である。

また、記帳・決算を行いながら、自分自身で経営努力まで評価する幅広い内容になっている。2日間で5期経営することになるが、通常の記帳・決算は行わず、西氏の考案した「マトリックス会計」を用い、経営評価は、STRAC分析を活用している。

なお、セミナーのスケジュールは次のとおりである。

第1日目（10:00～21:00）

MG第1期と決算練習

MG第2期とマトリックス会計

MG第3期と決算

STRAC分析と経営計画

（第1日目終了後、交流会）

第2日目(9:30～17:00)

MG第4期

MG第5期

講義

(3) MGの評価

MGは、ゲーム性を持つ経験学習の手法として高く評価されているが、今回は別な面で評価してみたい。

ア、マトリックス会計の合理性

MGのマトリックス会計は、記帳・決算を合理的かつ単純に処理することを可能にしている。

マトリックス会計とは、マトリックス(行列)を利用した決算方法で、行を借方、列を貸方、とした表(マトリックス会計表)のマスに各仕分けを整理、記入することで決算をしてしまうものである。

通常、決算に使用される損益計算書・貸借対照表は、勘定科目を借方・貸方に分け、左右に直線的に配置しており、勘定科目毎の金額はわかるが、1会計期間中の勘定科目間の動向は見えない。

しかし、マトリックス会計表の場合、勘定科目を借方・貸方の行列の表を利用し、面的に整理することで、勘定科目間の動向を把握することが可能になっている。しかも一枚の表で整理され、原価計算まで機械作業的に決算してしまうという合理的でシンプルなものである。

これにより、一会計期間の経営内容が視覚的に把握することが可能になり、また決算が単純化されたことで、2日間で5期の会社経営と決算と分析も可能している。

イ、「行入」に基づく教育手法

MGでは、ユニークな教育手法が取り入れられている。

研修中は、休憩や考える余裕もなく、架空の会社経営を一人でしなくてはならない。ゲーム中は、その意味がわからなかったが、後で、西氏はそれ自体が教育手法であるとの主旨を説明された。

つまり、経営とは絶え間のない「意志決定」の連続で、決断力・先見力・バランス力の大切さを身に付けなくてはならない。そのためには、アタマで理解するのではなく、カラダで理解する必要がある。

そこで、考える時間を意図的に排除し、経営を体感させることで、決断力・先見力・バランス力を効率的に会得させようとするのがこの手法だというのである。これを西氏は「理入」ではなく「行入」と表現していた。

これは、企業の社員教育に携わる人ならではの手法であろう。教育に携わる者として非常に興味深いものであった。

ウ、広範囲な異業種交流

MGは、あらゆる業種・役職が集まり、互いが刺激を受ける場である。

異業種交流の場は、様々なところにあるが、MGの場合、「経営」を切り口とした研修であるため、業種や役職を問わない。そのため、様々な人が集まってくる可能性がある。

今回、MGを継続されている方々と交流があった。参加していた方々は、企業内容や規模・役職が異なるにもかかわらず、経営の考え方が明快であり、興味深い話が多かった。これは、それぞれの個性的な魅力もあるだろうが、MGの効果も大きいように感じられた。

(4) 当校の学生を対象としたMGについて

以上の点で、MGは、教育的に十分価値のあるものだと考えられるが、当校の学生が耐えうる内容が否かという疑問が残った。

その点について、西氏は、「すでに小学校を対象にしたMG(MGジュニア)を定期的で開催しており、小学生でも十分可能であるから、全く問題ない。」とのことであった。

「行入」という観点からすれば当然のことかもしれない。

4 調査結果の利活用法

MGは、経営の本質を興味深く身に付ける方法として有効であり、当校においても、経営演習・簿記演習等での活用により、経営面の実践教育を強化することが可能であると思われる。

今後、他のMGについても比較検討しながら、実践教育のための教材として、導入を検討してはどうか。

5 利活用法をはかる上での問題点

ア、MGは製造業を想定した経営になるため、農業とは業種が異なる。

イ、教材が高価である。

ウ、インストラクターが必要となる。